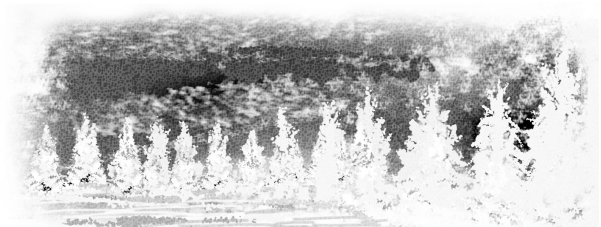


淳風集

小林 貴子

枯岬祈りの形に進む舟  
逢ひに行く時雨に胸を濡らしつつ  
ささら電車気のいい小父さんの如く  
鯛焼を妻恋坂に購ひぬ  
十二月八日海鼠の口を裂く  
顔見世のまねき仰げば雨粒が  
凍蝶の屍を焚ける火色かな  
ご城下の鉤の手ばかり梅見頃



聖樹の灯車窓を流れやまぬなり  
地震雲らしきが出でて寅彦忌  
ビル風手首首首守れ  
乗り切れぬ齢となりぬハロウイン

俳句弾々

小林 貴子

中原道夫句集『一夜劇』（二〇一六年十月二十五日 ふうんす堂）を読む。本集は正字（旧漢字）が用いられている。

立錐の余地春雨の傘立に

俳壇デビュー時から著者は言葉のひねった用い方で読者をあっと言わせてきた。我々は日ごろ「立錐の余地もない」という言葉を使っているが、それを反転させ、「春雨を来て傘立てに傘を立てようとしたら、まだ二、三本は立てる余地があった」意味にこの語を使うというのがその面目である。

蟻地獄獄中の手記なまなまし

この手法には常に賛否両論がついて回る。〈獄中の手記な

まなまし〉は、たとえば大道寺将司の著書に接すれば身に沁みて感ずるところである。しかし私がこのフレーズを思いついたとしても、上五の季語は〈蟻地獄〉とほしくないだろう。あなたは〈蟻地獄〉を選ぶだろうかどうだろうか。

齒肉にも夏痩せひそみる気配  
虫干しや家のほらわた出す思ひ

言葉の選択で読者を驚かすのでなく、これら着実な実感に立脚して詠まれた作品の方に、現在の私は共感する。しかし走る蟻産婆迎へにゆくごとし

離れよと言ふに残暑のやうな奴

こんな鮮やかな比喩にはやはり心惹かれてしまうものだ。